

まえがき

日本語の「ジョンが干し草をトラックに積んだ」に当たる内容を英語で表現する場合、以下のような2通りの言い方が可能である。

John loaded hay onto the truck.

John loaded the truck with hay.

どちらの表現でも load という動詞が使われているが、一方では hay が目的語になっているのに対して、もう一方では the truck が目的語になっている。このように動詞が2通りの構文に現れる現象は構文交替と呼ばれており、上記のような例は特に「場所格交替」として知られている。本書は英語の場所格交替を取り上げ、なぜこのように複数の構文が成立するのか、それらはどのように使い分けられているのかという問いを、認知言語学の観点から考察する。

本書は、筆者が2021年に東京大学大学院に提出した博士論文「認知言語学の観点から見た英語の構文選択：捉え方の意味論と使用基盤モデルに基づく場所格交替の分析」を書籍化したものである。捉え方を重視する意味観（捉え方の意味論）と使用基盤モデルは、認知言語学の特徴としてよく取り上げられるものの、両者の関係が十分に語られていなかったり、その一方のみに依拠して研究が行われたりすることがある。しかし、認知文法——認知言語学に属する理論の1つで、Ronald W. Langacker が提唱するもの——においては、両者が一体となった言語観が提示されている。本書でもそのような認知文法の考えに依拠して分析を行う。

書籍化にあたり、捉え方の意味論と使用基盤モデルが有機的に結びついた文法観を「豊かな文法」と名づけ、書名に含めることにした。筆者が「豊かな文法」という用語を初めて用いたのは、月刊誌『英語教育』（大修館書店）で2021年度に平沢慎也氏と担当した連載「事例から眺める「豊かな文法」の世界」であり、この連載では事例に基づく英語学習の在り方を扱った。本

書は認知言語学の専門書であるが、言語研究者だけでなく、連載で「豊かな文法」に興味を持ってくださった英語学習者、英語教員の方にも読んでいただけるように、できるだけ専門用語に解説を加えたり、学術的背景を暗黙の前提とせず明示的に説明したりするように心がけた。

本書が扱う主な現象は英語の場所格交替であるが、場所格交替は英語のほかの文法現象とも関わり合っている。場所格交替と同じような発想に基づく現象を見出せることもあれば、場所格交替の構文が別の構文（受身文など）と組み合わせられていることもある。また、日本語との比較・対照をすることで見えてくる特徴もあるだろう。したがって、関連する文法現象を扱った文献も幅広く参照し、場所格交替の分析に生かすよう努めた。

本書が場所格交替とその関連現象の解明に、そして認知言語学の進展に、わずかでも寄与することができていれば幸いである。

目 次

まえがき	iii
本書を読まれる前に	1
本書で前提となる考え	1
本書で扱うデータ	8
本書で扱う文法現象の例	9
本書の構成	11
 第1章	
序 論	13
1.1. 構文交替	13
1.2. 認知言語学の特徴	15
1.2.1. 捉え方の意味論	15
1.2.2. 使用基盤モデル	17
1.3. 研究の実践方法	20
1.4. 場所格交替の概観と本書の目的	24
 第2章	
認知言語学の構文研究と場所格交替	29
2.1. 捉え方と文法	30
2.1.1. 捉え方と動機づけ	30
2.1.2. フレーム	33
2.1.3. プロファイル（トラジェクター・ランドマーク）	38
2.1.4. 捉え方の柔軟性（メトニミー）	40
2.1.5. メトニミーとしての構文交替	42
2.1.6. 捉え方の転換の自然さ	44
2.1.7. 捉え方の転換と場所格交替	47

2.1.8. 場所格交替における2つの構文の使用範囲	52
2.2. 使用基盤モデルと文法	54
2.2.1. 「使用基盤モデル」という用語について	54
2.2.2. 構文と慣習性	56
2.2.2.1. マクロの視点	56
2.2.2.2. ミクロの視点	63
2.2.2.3. 文脈とレジスター	70
2.2.3. 構文ネットワーク	75
2.2.3.1. 構文ネットワークと構文交替	75
2.2.3.2. 認可と類似性判断	78
2.2.3.3. 交替の可否	80
2.3. 事例研究：穴あけ構文	87
2.3.1. 穴あけ構文の特徴	87
2.3.2. コーパス調査	90
2.3.3. 穴あけ構文のネットワーク	93
2.4. まとめ	96

第3章

場所格交替の先行研究と課題	97
3.1. 統語的アプローチ	99
3.2. 統語的アプローチの破棄	100
3.2.1. 構文の意味の違い	100
3.2.2. 1970年代の状況	102
3.3. 語彙意味論	104
3.3.1. Rappaport and Levin (1988)	104
3.3.2. Pinker (1989)	105
3.4. 構文文法	107
3.5. 残された課題	112
3.5.1. 課題1：なぜ移動物目的語構文を基本とする研究が多かったのか	112
3.5.2. 課題2：場所目的語構文の意味はどのように特徴づければよいか	114
3.5.3. 課題3：2つの構文で名詞句の分布はどのように	

異なるか	115
3.5.4. 課題4：ほかの構文と組み合わせたときに どのような性質が見られるか	116
3.5.5. 課題5：場所格交替動詞が用いられやすい レジスターとは	118
3.5.6. 課題6：非交替動詞が例外的に交替するのは どのようなときか	119
3.5.7. 課題7：英語場所格交替に対応する日本語の表現は どのようなものか	120
3.6. 以降の構成	120

第4章

場所格交替と評価の意味	123
4.1. 意味的韻律とは	124
4.2. 意味的韻律の論点を整理する	129
4.2.1. 意味的韻律と評価の意味	129
4.2.2. 意味的韻律は肯定的・否定的の二値的か	130
4.2.3. 意味的韻律を担う単位	132
4.2.4. 意味的韻律を左右する諸要因	135
4.3. 事例研究：load	139
4.3.1. 調査方法と結果	139
4.3.2. 2つの構文の比較	141
4.3.2.1. 場所名詞を中心に	141
4.3.2.2. 移動物名詞を中心に	145
4.3.3. loadの場所目的語構文と意味的韻律	153
4.4. 事例研究：smear	154
4.4.1. LDOCEの記述	154
4.4.2. 2つの構文の比較	155
4.4.3. (all) overを用いた移動物目的語構文	164
4.5. 全体的解釈・状態変化・評価	166
4.6. 評価(評価の意味)の位置づけ	168
4.6.1. 文法研究、意味研究と評価	168
4.6.2. 談話研究と評価	169

4.6.3. 意味的韻律と談話	170
4.6.4. 認知言語学と評価	172
4.7. まとめ	173

第5章

場所格交替と構文の複合形	177
5.1. 構文の複合形	179
5.2. 仮想変化	181
5.2.1. 仮想変化とは何か	181
5.2.2. 英語の仮想変化表現	182
5.2.3. 慣習性と創造性	185
5.3. Langacker の主体化	188
5.4. スルの言い回しと構文ネットワーク	192
5.4.1. スルの言い回しとしての複合構文	192
5.4.2. 複合構文のネットワーク	195
5.5. 複合構文に見る慣習的表現	198
5.6. 構文の複合形の種類とその分析方法	202
5.6.1. 構成要素タイプ	203
5.6.2. アマルガムタイプ	204
5.6.3. 競合タイプ	206
5.6.4. 交差タイプ	209
5.7. まとめ	211

第6章

場所格交替とレシピ	213
6.1. 言語知識の一部としての料理表現	214
6.2. レシピで用いられる非交替動詞	215
6.3. レシピにおける省略	218
6.4. レシピの調査	222
6.4.1. レシピの構造と調査対象	222
6.4.2. 調査方法	223
6.4.3. 調査結果	225

6.5. 5つの問いに答える	230
6.5.1. デフォルトとしての場所目的語構文	231
6.5.2. 場所名詞句の省略	235
6.5.2.1. 場所目的語構文の目的語省略	235
6.5.2.2. sprinkle over salt 型の動詞・不変化詞構文	237
6.5.3. 前置詞句と省略	242
6.5.4. 移動物目的語構文の役割	244
6.5.5. drizzle の位置づけ	250
6.6. 慣習性と話者の意識	256
6.7. 関連現象：目的語の省略と結果目的語	258
6.8. まとめ	261

第7章

非交替動詞が交替するとき	265
7.1. 創造的な言語使用としての代換	266
7.2. 構文と類推	268
7.2.1. Goldberg (1995) の構文文法	268
7.2.2. Goldberg (1995) の問題点	270
7.2.3. Boas (2003) の分析	271
7.3. 意図性と料理表現	273
7.4. 形容詞的受身	278
7.5. 慣習性の度合い	283
7.6. 先行研究との比較	285
7.7. 関連現象：under-V と under-V-ed	290
7.8. まとめ	293

第8章

英語の場所格交替に相当する日本語の表現	295
8.1. 料理表現と動詞	296
8.2. 調味動詞の抽出	299
8.3. 調味動詞の観察	303
8.3.1. 〈振る／加える／入れる／振り掛ける〉など	303

8.3.2. 〈為る〉	304
8.3.3. 〈整える／付ける〉	305
8.3.4. その他の動詞	306
8.4. 構文上の特徴と英語との比較	307
8.5. 動機づけと慣習性	314
8.6. まとめ	319

第9章

結 語	321
9.1. 全体のまとめ	321
9.2. 本書の意義	323
9.3. おわりに	325
あとがき	327
参考文献	331
索 引	350

本書を読まれる前に

本論の前に「本書で前提となる考え」「本書で扱うデータ」「本書で扱う文法現象の例」「本書の構成」というセクションを設けた。「本書で前提となる考え」は、「言語知識」や「文法」など、言語学における基本用語を確認するためのセクションである。言語学、認知言語学にあまりなじみがない方は、こちらを読んでいただくことで本論が読みやすくなるかと思う（本論と重複する部分がある）。「本書で扱うデータ」は、本書で扱う英語、日本語の例文についての説明である。ここでは、用例の収集方法や例文引用上の注意などをまとめている。本書は場所格交替以外にも様々な文法現象を取り上げているが、そのうちの一部は「本書で扱う文法現象の例」として記載した。続く「本書の構成」では、第1章から第9章までの流れを示している。なお、本書では、言語学分野の慣例に従って、文献は「野中 (2018)」のような形で略記している。「野中 (2018)」は野中が2018年に出版した文献のことである（ページ数まで載せるときには、「野中 (2018: 135)」のような形になる）。言及した文献はすべて巻末の「参考文献」に省略のない形で記載している。

本書で前提となる考え

1. 言語知識と文法

私たちはいつの間にか母語を身につけ、それを使用できるようになっている。言語使用を可能にする知識のことを、言語学では言語知識 (knowledge of language) と呼ぶ。日本語の母語話者 (native speaker) であれば、日本語についての言語知識を持っており、それを参照しながら日本語を使用していることになる。「知識」という言葉は、書籍を読むなどして意識的に身につけるものを指すことが多いかもしれないが、「言語知識」と言う場合の「知識」は（その大部分が）無意識のうちに習得されるものを指している。そして、

「構文スキーマ」という用語が用いられる。

構文の中にも様々なものがあるが、本書で扱うのは「項構造構文」である。文を形づくる上で重要な役割を果たすのが事態に関わる参加者の数と参加者同士の関係である。参加者を表す名詞句、つまり述語に対する「項」(argument) についてのこれらの情報は「項構造」(argument structure) と呼ばれる。項構造に関する構文が項構造構文であり、場所格交替でペアとされる構文はそれぞれ項構造構文の一種である。項構造構文以外に文を形成するための構文として疑問構文、否定構文などがある。実際の文は、このような複数の構文を組み合わせることで形成される (Croft and Cruse 2004: 264; Goldberg 2006: 21)。たとえば、Was he hit on the head yesterday? は、身体部位所有者上昇構文であると同時に、疑問構文、受身構文でもある (このような構文の組み合わせについては第5章で扱う)。認知言語学の中でも特に構文を言語の基本単位とする立場を構文文法 (construction grammar) と呼ぶ⁹。本書も構文文法の研究の1つとして位置づけられる。

1.4. 場所格交替の概観と本書の目的

英語の場所格交替には、自動詞型と他動詞型が存在する。自動詞型の構文をそれぞれ移動物主語構文、場所主語構文、他動詞型の構文をそれぞれ移動物目的語構文、場所目的語構文と呼ぶことにする¹⁰。

9 構文文法と一口に言っても、様々なものがあり、中には本書で示したような認知言語学の基本的な想定とは異なる考え方を採用しているものもある。各種の構文文法について概観するには Hoffman and Trousdale (2013) が便利である。構文文法の理論と分析例を紹介するものとしては Hilpert (2019) や早瀬 (2020) がある。構文文法という名前は付いていないが、Langacker (2005) 自身は認知文法も構文文法の一種であると考えている (Langacker (2005) は認知文法とそのほかの構文文法との違いも述べている。坪井 (2020: 29–31, 50–78) も参照)。研究者や論文によって「構文」という用語が意味するところや力点が違うことがあるが、それについては Taylor (2004, 2012: 第6章) が参考になる。

10 移動物目的語構文は使役移動構文と呼ばれる構文の一種である。場所目的語構文における場所名詞句は、状態変化の対象であり、単なる「場所」ではないとされるが (Pinker 1989: 78–79; 池上 2007: 235–236; 高見 2011)、本書では、ペアとなる2つの構文の対比がしやすくなるように、両構文で共通して「場所」という用語を用いることにする。

(10) 自動詞型 (swarm 交替)

- a. Bees are swarming in the garden. (移動物主語構文)
- b. The garden is swarming with bees. (場所主語構文)
ハチが庭で群がっている。

(11) 他動詞型 A (spray/load 交替)

- a. John sprayed paint on the wall. (移動物目的語構文)
- b. John sprayed the wall with paint. (場所目的語構文)
ジョンはペンキを壁に吹き付けた。

(12) 他動詞型 B (clear 交替)

- a. John cleared dishes from the table. (移動物目的語構文)
- b. John cleared the table of dishes. (場所目的語構文)
ジョンはテーブルの皿を片付けた。

自動詞型では主語と前置詞句の間で事態参与者の交替があり、他動詞型では目的語と前置詞句の間で参与者の交替がある。他動詞型は、移動物を散布したり、移動物を容器に入れたりすることを表す A と、移動物を除去することを表す B に分かれる¹¹。交替に参加する動詞の代表例にちなんで、(10) のような自動詞型を swarm 交替、(11) のような他動詞型 A を spray/load 交替、(12) のような他動詞型 B を clear 交替と呼ぶことがある (Levin 1993:

「場所らしさ」に関する認知文法の議論として、Langacker (2010) がある。

11 このほかに、Levin (1993) は wipe 交替と自動詞型の clear 交替を挙げている。wipe 交替は、他動詞型 B とほぼ同じ構造を示すが、Helen wiped the fingerprints off the wall./ Helen wiped the wall (*of fingerprints). のように場所目的語構文で移動物を示すことができないという制約がある (Levin 1993: 53)。自動詞型の clear 交替は、他動詞型 B の自動詞版であるが、Clouds cleared from the sky./The sky cleared (*of clouds). のように、場所主語構文では移動物を表現しづらいと言われている (ibid.: 55)。形容詞に着目すると、abundant などの交替も場所格交替の一種と言える。形容詞の場所格交替は自動詞型に近い。Salkoff (1983: 302) は Food for birds {abounds/is abundant} in the marshes./ The marshes {abound/are abundant} with food for birds. という例を挙げている。なお、刻印動詞の交替 ([imprint NP on NP] / [imprint NP with NP]) や授与動詞の交替 ([present NP to NP] / [present NP with NP]) は、Levin (1993) では場所格交替とは別のものだとされている。場所格交替という用語の範囲をどのように考えるべきかについては、野中 (2018) の議論を参照。

49-55)。本書では、場所格交替の中でももっとも盛んに研究がなされてきた他動詞型 A に焦点を当てて分析を行う。これ以降、単に「場所格交替」と言うときは他動詞型 A を指す。

自動詞型、他動詞型の場所格交替は、事態の捉え方を反映した言語現象として、様々な研究者が論じてきた (e.g. 池上 1980-1981; Pinker 1989; Langacker 1990: 第9章)。特に、移動物目的語構文は位置変化に焦点を当てた構文であり、場所目的語構文は場所の状態変化に焦点を当てた構文であるとする Pinker (1989) の説は、理論の違いを超えて広く受け入れられている。このような先行研究では、作例によって (4) - (6) のような容認可能な文と容認不可能な文を対比させることで、捉え方という微妙な差異を明らかにしてきた。第 1.3 節で見た研究実践のうち、(I) の研究は、こういった作例の手法によって大きな進展を見せたと言える。

一方の構文のみが容認できるような例文のペアを作ることができるのは作例研究の利点ではあるが、研究者の意識にのほりやすい例とそうでない例がどうしても出てきてしまうため、扱うデータに偏りが生じることは否めない。実際、場所格交替動詞の実例を探せば難なく見つかる以下のような表現について十分な記述がない (いずれも BNC の例)。

- (13) a. The King and Queen loaded him with wealth and honours but Columbus wanted even more.

国王・王妃両陛下は、コロンブスに富と名誉をお与えになったが、彼はさらに多くのものを欲しがった。

- b. Sean is really a very sweet guy and loaded with talent.

ショーンは本当にとってもやさしい奴だし、才能にあふれている。

- (14) a. Mix together the lemon rind, parsley and chopped garlic and sprinkle over the rice before serving.

レモンの皮、パセリ、刻みニンニクを混ぜ合わせ、ごはんにかけてたら、できあがり。

- b. Season to taste and sprinkle with parsley before serving.

お好みで味を調えて、パセリをふりかけたら、できあがり。

(13) では移動物の項に honour (honor) や talent といった抽象物が現れている。これまでの研究では物理的行為 (e.g. トラックに干し草を積む, 壁をペンキで塗る) を表す例ばかり研究されてきたが, このような抽象名詞の使用傾向は, 移動物目的語構文と場所目的語構文で違いはないのだろうか。そもそも2つの構文で用いられやすい名詞の性質に違いはないのだろうか。(13b) では load が過去分詞 (loaded) で使用されているが, なぜ状態を表すのに場所格交替動詞が使われているのだろうか。(14) は (a), (b) とともにレシビの用例である ((a) では移動物目的語, (b) では場所目的語が省略されている)。実は, 場所格交替動詞は調理手順を表すのによく用いられるのだが, その場合, 2つの構文はどのように使い分けられているのだろうか。先行研究ではこのような問題がほとんど取り上げられておらず, 場所格交替における2つの構文に関しては, 使用範囲(Ⅱ), 慣習性(Ⅲ), 創造性(Ⅳ)のいずれもまだ十分に明らかになっていないと言える。そして, 上記の例文には日本語訳を付したが, 英語の場所格交替で表現される事態は日本語ではどのように表現されているだろうか。英語の場所格交替の研究成果を生かし, 対応する日本語の表現についても考察することにする。

上記のようなこれまで扱われてこなかった事例を含めて記述を行い, 「豊かな文法」を通して眺めたときに, 場所格交替がどのような姿を見せるのか。これを明らかにするのが本書の目的である。また, 本書は場所格交替を例に, 認知言語学の構文研究の可能性を模索するという側面も持つ。本書ではコミュニケーションに根差して言語知識が形成されるという使用基盤モデルの考えを重視し, 機能主義(伝達機能を言語の本質と見なす立場)の言語研究を広く参照し, 多角的に言語使用を考察していく。コーパス上の事例の観察を行い, 用例数をもとにした議論も行うが, 単に使用例の数をカウントするだけでなく, 意味・機能・使用文脈を取り込んで初めて十全な使用基盤的分析であると言える。そのような使用基盤的な分析と捉え方の分析が一体となった研究の実践例を本書で示したい。

本章の冒頭で, 詩人ルイスのことばを引用した。詩は手垢にまみれたことばを磨きあげ, 言語を生き返らせることができるのだと, ルイスは述べる。私は言語学にも同じような役割があると思っているし, そのような言語学を

やりたいと思ってきた。その思いは本書でも変わらない。英語の場所格交替はすでに60年以上の研究の歴史を持ち、些末なことを除けば大概のことはわかっているという印象を抱いている人もいるかもしれない。そんな、言語学者にとってはおなじみの場所格交替がいかに驚きに満ちているか——英語では loaded with surprises といった表現が可能である——を示し、場所格交替の新しい捉え方を提案することができればと思う。

- (17) A nuclear extract (6 ml, 0.6 $\mu\text{g}/\mu\text{l}$) from 5×10^8 cells were loaded at 4°C onto a Heparin-Sepharose column (bed volume = 6 ml) [...]
- (18) If you saved the program to a file called BASPROG, you could load it into BBCBASIC(Z80) with the following command: [...]

このようにして得られた例文数は、移動物目的語構文が 201 件、場所目的語構文が 327 件であった。これらの用例を対象として、構文ごとに移動物と場所の名詞を収集している。以下、場所名詞、移動物名詞の順で 2 つの構文の名詞の分布を比較し、実際に例を観察しながら、構文と意味的韻律の関係について論じる。

4.3.2. 2 つの構文の比較

4.3.2.1. 場所名詞を中心に

まず、場所名詞を比較する。移動物目的語構文に生じた場所名詞は 102 種であり、総生起数は 206 件であった。それに対して、場所目的語構文の場所名詞は 185 種、341 件であった。結果を以下の表に示す。名詞の種類が多かったため、表には 3 回以上生起する名詞に限定して載せている。名詞は生起回数に基づいて並べられている。たとえば、car は移動物目的語構文における場所名詞として 12 回用いられている。これらの表から、生起する名詞の傾向が、どちらの構文を取るかによって異なることがわかる。

表 4-1. 移動物目的語構文の場所名詞

場所名詞 (into, on, onto)	生起数
car, trailer, van	12
cart, lorry	9
barge, truck	8
ship, train	6
vehicle, 自動車名	5
boat, flight, plane, transport, tub, 飛行機名	3
生起数が 1, 2 の名詞を含めた合計	206

表 4-2. 場所目的語構文の場所名詞

場所名詞 (with)	生起数
人称代名詞 (人)	21
truck, van	15
lorry, ship	12
人名	11
car, trailer, trolley	7
table, tray, wagon	5
aircraft, brush, train	4
barge, boat, camera, filter, pen, pistol, reel, shotgun, vehicle, 自動車名, 船名, 飛行機名	3
生起数が 1, 2 の名詞を含めた合計	341

それでは、実際に例を見ていこう。移動物目的語構文、場所目的語構文ともに、car, ship といった場所名詞が多く用いられており、乗り物を表す名詞を含む事例は両構文で慣習化していると言える。以下の例では、移動物目的語構文 (19) と場所目的語構文 (20) がどちらも運搬のために乗り物に荷物を載せるという事態を表現している。なお、動詞 load と前置詞を太字にして、カウントした名詞には下線を施した。

- (19) a. And his foreman makes sure the containers are **loaded onto** the trucks and dumped over the border.

そして、彼の監督が、コンテナがトラックに積まれ、国境を越えたところで投棄されるようにする。

- b. He and Geoff went over there and **loaded** them [= the bricks] **on** the trailer.

彼とジェフはそこに行き、レンガをトレーラーに積んだ。

- (20) a. [...] the transport firm in Decin had **loaded** up the lorry **with** gas containers from Belgium.

ジェチーンにある運送会社がベルギーのガス容器をそのトラックにぎっしり積んだ。

- b. From thirty to sixty trucks were **loaded with** bricks daily for dispatch

6.4. レシピの調査

6.4.1. レシピの構造と調査対象

レシピのデータを集めるために、市販の料理本を用いることにする。なお、本書では、「料理の文脈」「レシピ」「料理本」という用語を区別して用いることにする。料理の文脈は、媒体を問わず料理表現が現れる文脈を指すのに用いる。料理の文脈には、家族の会話で夕食が話題になる場面や小説で料理が登場する場面も含まれる。料理の文脈のうち料理表現がもっともよく用いられるのがレシピである。レシピは料理の調理方法を説明した個々のテキストであり、レシピを複数収録している書籍が料理本である。料理本にはレシピ（調理手順の指示）以外にも「はしがき」「食材の説明」「コラム」「索引」などが収録されている。そして、レシピには「料理名」「提供人数」「調理時間」「材料」「調理方法」が含まれる。場合によっては「料理についての背景知識」や「調理方法の補足」なども書かれている（図 6-1）⁷。このうち、本書がデータの取得対象としたのは、実際に調理手順が書かれている「調理方法」と「調理方法の補足」である。図 6-2 として、レシピの例を 1 つ挙げておく。

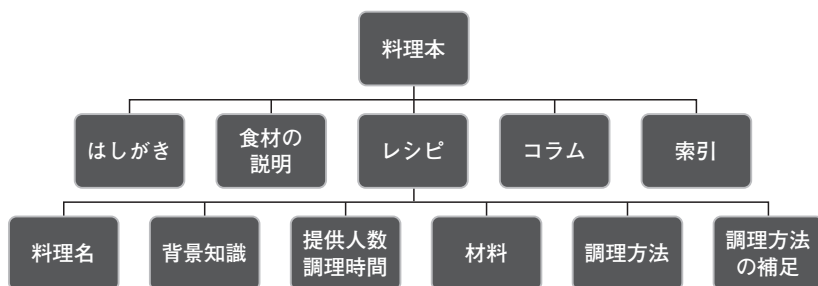
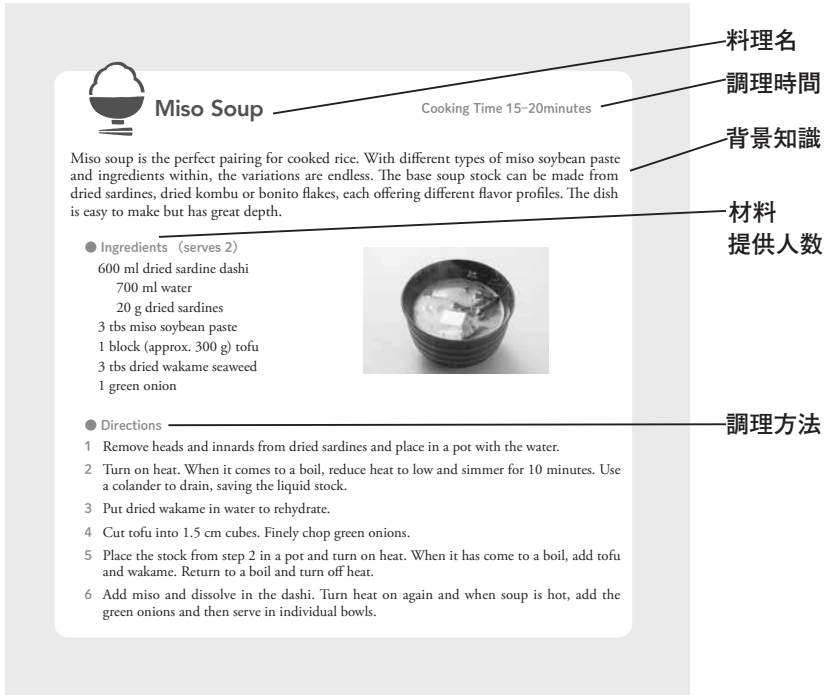


図 6-1. 料理本とレシピの構造

7 このようにテキストの構成を扱うのは、Biber and Conrad (2009) の言うジャンルの観点を取っているということになる（第 2.2.2.3 節を参照）。

図 6-2. レシピの例⁸

6.4.2. 調査方法

本書では、特徴の異なる 3 冊の料理本を用意した。

- *How to Cook Step-By-Step* (Octopus Publishing Group, 2013)

3 冊の中でもっとも調理手順を詳しく説明しており、比較的目的語の省略が少ない。一連の手順を箇条書きで載せているのに加えて、手順のうちいくつかは欄外(「調理方法の補足」に該当)に調理途中の写真を用いて二重に調理方法を説明している。

8 畑佐一味・福留奈美『めしあがれ：食文化で学ぶ上級日本語』(くろしお出版, 2021, p. 106)を一部改変。

索引

構文名索引

穴あけ構文 11, 87–96, 268, 285,
324 → cf. 結果目的語

受身, 受身文, 受身構文 iv, 10, 24,
45–47, 59, 74, 81, 85, 86, 116, 126,
145, 179, 191–193, 212, 270, 279

形容詞の受身, (結果) 状態を表す受
身 50, 86, 116, 116–118, 150–152,
161–165, 174, 176–202, 211, 212,
278–284, 288, 289, 292, 293, 323,
324

動詞の受身 116, 191

get 受身 126, 127, 137, 175

結果構文 61–63, 68, 69, 75, 88, 90, 94,
95, 109, 114–116, 139, 206, 207, 224,
263, 287

使役移動構文 24, 108, 269–273

身体部位所有者上昇構文 18–20, 23, 24,
283 → cf. 身体部位所有者上昇交替

中間構文 73–75

動詞・不変化詞構文 52, 110, 206, 207,
219, 229, 237–244, 261, 324

二重目的語構文 75–77, 79–85, 103, 144,
210, 294, 324 → cf. 与格交替

命令文, 命令構文 73, 82, 84, 103, 169,
209, 210, 224, 277, 291, 310

make 使役構文 60, 69, 70, 75

under-V-ed 構文 292, 293

way 構文 89, 94, 95

用語索引

あ

アマルガムタイプ → 継承, 構文の継承

意味的韻律 124–176, 324 → cf. 評価,
意味の評価

か

格文法 99, 102, 103

仮想変化(表現) 181–192, 195–197

過程志向 60–63, 88, 261, 314 → cf. 結果
志向

慣習的(な)表現 5, 20, 22, 23, 63–68, 70,
73, 75, 79, 80, 135, 138, 161, 163,
174, 175, 179, 198–200, 202, 211,
212, 234, 257, 258, 267, 268, 271,
282, 290, 322–325

競合タイプ → 継承, 構文の継承

継承, 構文の継承 104, 202, 203, 207,
209, 212

アマルガムタイプ 204–207, 250

競合タイプ 206–209

交差, 交差タイプ 178–181, 203,
209–212, 219, 282, 283, 293, 294,
322

構成要素タイプ 203, 204, 211

結果志向 60–63, 88, 89, 143, 212, 314
→ cf. 過程志向, 好まれる言い回し

結果目的語 10, 11, 87–89, 258–261, 324

語彙意味論 104–107, 109, 115, 299

交差, 交差タイプ → 継承, 構文の継承